



発行
 社会福祉法人 牧ノ原やまばと学園
 〒421-0412 静岡県 牧之原市 坂部 2151 番地 2
 TEL:0548-29-0221 FAX:0548-29-0157
 E-mail:honbu@yamabatogakuen.jp
<http://www.yamabatogakuen.jp/>
 郵便振替 00800 - 6 - 14641
 頒価年額 600 円(千共) 1部 100 円(千共)
 (送料・消費税込み)
 寄付金の一部に購読料を含む場合があります。

もうすぐ新年

(一)

昨年初頭から、国内外に最大の緊張をもたらしていたコロナ感染状況は、日本では本年九月末緊急事態宣言が解除されて以降、感染者数が徐々に減少し、十一月十三日現在、次のように下火になってきたのは、たいへん喜ばしいことです。

(19県が感染者数ゼロ、11県は感染者数一名。大阪府が最大で三十名、東京都は二十四名。)

しかし専門家によれば、もし三回目のワクチン接種がない場合には、人との接触を六〇%に抑えたとしても五か月ほどで流行の波(第六波)が来る見込みとのこと。既に三回目のワクチン接種実施方針が国から示され、来月からは医療従事者を対象に

三回目の接種が始まるようです。第六波の到来を何としても防げますようお願いしています。

当法人でも、長い間、行動制限や面会制限など、ご利用者も職員も窮屈な日々を過ごしてきましたが、この間、クラスターが発生しなかったのは本当にありがたいことでした。



宣言解除後の十月一日からは、周囲の様子を見ながら慎重に、面会・行動制限を緩めてきました。

通所施設のご利用者は、大半が家から通っていますので家族との交わりは確保されていますが、入所施設の人たちは、ご家族との面会などが絶たれると、少なからぬ影響を受けたりします。私の友人も、記憶力低下もあって高齢者施設に入居中ですが、宣言解除後しばらくぶりに訪ねたところ、かつては「みちこさん」と呼んでくれたのに、キョトンとしたままだだったのでショックでした。

恐らく、地域で暮らす一人暮らしの高齢者や障がい者も(訪問者が減り、外出の機会も少なくなり)、同様の被害?を受けたことでしょうか。引き続き感染予防に気をつけながら、孤立や孤独ではなく、人と人との交わりによる笑顔が生まれるよう、私どもにできることをしていきたいと思えます。

(二)

十月には、衆議院議員選挙だけでなく、当地では、牧之原市長並びに市会議員選挙(市長選挙は無投票で当選)、そして同時に、参議院議員補欠選挙もありました。

選挙になると、お決まりの、「お願います」を連呼する選挙カー

の光景が見られるのですが、また始まったなあと思っていた私に対して、我が家に住むインドネシア人のEPA生セプティさんが、「とても面白い。珍しい。日本の選挙は、いつもこうなんですか?」と質問。聞けば、インドネシアでは、戸別訪問や署名活動の他、ツイッターやフェイスブック、ユーチューブやインスタグラム等、ネットツールを使うことが多く、選挙カーで連呼する方法はないとのこと。(インドネシアの方が進んでいる!と思う人が多いのでは?…)

日本の選挙時の名物、「街中を、候補者名を連呼して走行する選挙カー」に関しては、「声がうるさい。何とかならないか」とか、「名前だけ連呼しても意味がない」という意見も多いようなのですが、昔から一向に変わらないのは、選挙活動のルールがあつて、法律にも絡む事情があるためなのだそうです。

選挙活動ができる期間は、公示または告示日に立候補の届出が受理された時から投票日の前日までとなっていますが、選挙活動中やつてはいけないことが公職選挙法に定められていて、それらは、例えば、「戸別訪問」「署名運動」「飲食の提供」「連呼行為」等。但し、連呼行為については、公職選挙法

によれば、「演説会場(街頭演説を含め)や選挙カーでは連呼OK」となっている一方、「走行中の選挙カーの中で、『私の政策はこれこれです!』と選挙演説することは禁じられているのだそうです。つまり、走行中の連呼行為はOKだが、演説するのはダメ。走行中でなく停止した車で演説するのはOKとなるわけです。そういうわけで、どんなに無意味に思われても、うるさくても、公職選挙法の中身が改められない限り、選挙カーから名前だけを連呼する日本の名物光景は続くことになるわけです。

但し最近では日本でも多くの候補者が、ネットツールを利用し始めているとのこと。このような方法が主流になり、選挙中であっても日本の街中が静かな日は、意外に早く来るのかもしれない(?)

(三)

目下、「ケアセンターさざんか(仮称)」と、「デイサービスセンター真菜」の建設が、順調に進展しています。前者に「(仮称)」という言葉がつけられているのは、建設後この名前を改める予定だからで、すでに理事会で「ケアセンター花もも」と決定されましたので、皆様にもお知らせします。

実は「ケアセンターさざんか」

は、一九九七(平成九)年四月、法人初の通所施設として、やまばと希望寮内に併設された施設です。そのとき名前を「さざんか」と命名したのは、当時の町(榛原町)の町花が「さざんか」で、町のあちこちに咲く、「さざんか」の花のように、町民に愛され、周囲の人々を和ませる存在でありますようにと願ったことでした。

その八年後の十月、榛原町と相良町が合併し牧之原市となったのですが、その頃、「牧之原市総合健康福祉センター」の建物が完成し、名前を市民から募集。名前の選考委員会に私も招かれたのですが、当日他の重要な予定があつて参加できませんでした。ただ、何となく不吉な予感がした私は、担当者の方に、「すでに、「ケアセンターさざんか」という施設があるので、『さざんか』という名前だけ選ばないようお願いします」と頼んで欠席したのでした。

まもなく、私の所へ役場の男性職員二人が訪れ、「大変申し訳ありませんが、町の人々の希望により、名前は、「牧之原市総合健康福祉センター『さざんか』」と決まりました。どうぞ、ご承認ください」と告げたのです。あれほどお願いしたのにと思いましたが、町花であ

り、市の建物の名前としてふさわしいのだろうと思ひ譲歩することにし、「それでは、こちらの名前を変えますので、その手続きにかかる費用や印鑑代等を払ってください」と伝えると、二人は困惑した顔で、「まあまあ、そうおっしゃらずに。あまり間違えることはないと思います。もし大きなミスが生じたら、その時変更したらどうでしょう」と懇願します。二人をあまり困らせてもと思い、結局、その後も案じたとおり、二つの建物を混同する出来事はしばしば起きました。しかし、適切な変更時期が見つからず名前の変更は延長されてきたのですが、今回の建設を機に、「ケアセンター花もも」と名前を改めることにした次第です。

先日、こんなことがありました。「さざんか」の元ご利用者が召され、彼の遺体を載せた霊柩車を、みんなで、「さざんか」の建物近くでお見送りすることになったのですが、待てど暮らせど、車は一向に現れません。しびれを切らした施設長がご遺族に連絡したところ、「牧之原市総合健康福祉センターさざんか」へ行ったことが分かりました。方向転換して来る霊柩車を待ちながら、来春、「花もも」の

名前になるまで、まだまだ混同事件は続くかも、と思ったのでした。

今年もあつという間に時がたち、間もなくクリスマスと新年を迎えようとしています。クリスマスは、ともに歩んで下さる主イエスを覚えるとき。イエス様は、「私は新しい戒めをあなた方に与える。互いに愛し合いなさい」と言われましたから、もし私たちが求めれば、そのような歩みを可能にしてください。

新しい年の予測はできませんが、おぼろげに分かることは、ICTやDXによる生活の変化、既存の価値観や枠組みが覆され激動の変化が続くだろうということです。

当法人にも、いろいろな計画があります。「人の心には多くの計画がある、しかしただ主の、み旨だけが堅く立つ」(箴言19章21節)を覚えながら、上を仰いで進みたいと願っています。

〈理事長〉長沢道子



グリーンフケアという希望

入 江 杏

「悲しみとともにどう生きるか」この私の問いかけに、様々な知見と体験を持つ方々が応えてくださった珠玉のメッセージ集を二〇二〇年十一月に出版しました。集英社新書『悲しみとともにどう生きるか』(入江杏・編著)です。

ノンフィクション作家・柳田邦男、批評家・若松英輔、小説家・星野智幸、臨床心理学者・東畑開人、小説家・平野啓一郎、宗教学者・島蘭進各氏が、ご自身の視点から、喪失体験や悲しみとの向き合い方などについて語った講演、私とのトーク、ご寄稿を編んだ一冊です。共感と支えあいの中で、「悲しみの物語」は「希望の物語」へと変容していきます。軽妙な語り口も楽しめる本編の各章に、私が、まえがきとあとがきを添えました。

「世田谷事件の遺族です」。たったこれだけのことを言うのに、六年かかった。事件後六年間、母から「決して事件のことを口外してくれないな」と禁じられ、沈黙を守っていた。

事件の第一発見者になってしまった母。母が何より恐れたのは、事件との関わりを世間に知られることだった。遺族となった私たちへの差別・偏見。遺された私たちを思つての、母の強い懸念を前にすると、私は沈黙せざるをえなかった。何よりただ一人、四人の亡骸を見た母の辛さを思うと、私は母の言いつけに背くことができなかった。

その母と私が精神的に訣別して、自分からの発信を決意したのは、母のある言葉がきっかけだった。「礼くんは亡くなくても仕方がなかった……」。甥の礼は自閉。その障害を告げられた時、当初、受容できずに苦しんでいた妹。その苦労を思つての母の一言だったのかもしれない。当時としては、母の心配は当然のことと思う。甥の行く末に対して、母と一緒にあれこれ余計な心配をしていた私だったのに、母の言葉に突然怒りが降りて湧いた。自分でも驚くほど腹が立った。私の剣幕に母は驚いた。「実際の娘にこの年になって、叱り飛ば

されるなんて」。その直後こそ母は体調を崩したが、ほどなく日常を取り戻した。私は、日々の介護の合間を縫って、母には気づかれないう発信を続けた。それは、「沈黙を強いるものへの抗(あらが)い」だった。母は私の抗いには気づくことなく、私たち家族に看取られて静かに逝った。母は私の鏡。私は自分の中の「ステイグマ(負の烙印)」に問いかける。「何をほばかり、畏れて、自らの苦しみや悲しみをなかつたことにしなくてはならないのか?」と。

(本書、六〇八ページ)

悲しみから目をそむけようとすると、社会は、実は生きることを大切にしたい社会なのではないでしょうか。

私は、「グリーンフケア」の活動や出版を続ける中で、「未解決凶悪事件の犯罪被害者遺族」という世間から与えられる単一のフレームを外すことができ、錨を下ろしたままになつてしまふ悲しみから、解放されました。

「ミシユカの森」は、世田谷事件と妹一家追悼の思いから始まった活動ですが、やがて、様々な苦しみや悲しみに向き合い、共感しあえる場、グリーンフケアのネットワー

クとして、発展してきました。悲しんでいい。『悲しみ』は『愛しみ』だから。誰かの悲しみに気づいてそつと手を差し伸べて。一人ひとりに悲しみを背負わせるのではなく、ともに考えていきたい、と。

本年十二月四日(土) 十四時から十六時半まで、オンラインで「ミシユカの森二〇二二」を開催する予定です。中島岳志さんと島蘭進さんをお迎えし、「利他とグリーンフケア」をテーマに、皆さまとともに考えていきたいと思つています。

新型コロナウイルスのパンデミックにより世界が悲しみに瀕する今、悲しみを通じてこそ得られる経験の次元への関心も高まっています。悲しみから学ぶ「グリーンフケア」には、悲しみのさなかにいる人、それを支えたい人は勿論、すべての人が豊かに深く生きるヒントが詰まっています。



ケアホームもくれんから

高齢者施設へ移る人たち

【野澤きみ子さん】

「いつも「お姉ちゃん、来る?」「待ってる」と話しながら、お姉さまの来訪を楽しみにしていた野澤さん。その笑顔と可愛らしい仕草は、重い雰囲気の時さえも和ませ、一変させるほどでした。

お姉さまとお墓参りに行きたい気持ちが強くと、来れないとわかると、興奮して眠れなくなったりしました。当時は、ぐっすり眠ると元気になりましたが、最近は一、二日もかかるようになりました。

食べ物好き嫌いがなく、いつも完食。きざみ食でしたが、最近はお下痢になることも多く、完治までに時間がかかり、排泄も職員の介助が必要になってきました。

通所先のケアセンターさんに行くことも、「えらい(疲れた)」と訴えるようになり、高齢者としての今後の暮らしを考え、特別養護老人ホームグレイスへ移ることになった次第です。誰からも愛される野澤さん、ご多幸を祈っています。

(世話人 村松明子)



【坂下町子さん】

もくれんでは、仲間に「〇〇さん、それ、似合ってるね」「〇〇さん、行くよ」等、優しく話してくれたり、世話を焼いてくれたりしました。職員にも「今日は大変だね」「休みは何してたの?」「夜勤よろしくね」等、いろいろ気遣ってくれました。歌手の氷川きよしが大好きで、「私の彼氏」と言っていて「ニコニコ」されます。ファンクラブへ入り、グッズを買ったり、コンサートへも何度か行き、「きよし!」と応援し、楽しそうに過ごされました。

しかし、加齢とともに年々、散歩も短距離となり、浴槽をまたぐことも困難になってきました。排泄も職員の解除を必要とすることが多くなり、きつい言葉も聞かれ始めました。

今後、どのようにしたら穏やかに過ごせるだろうかと考え、高齢者施設への移行を検討してきました。本当は、野澤きみさんと一緒に「グレイス」が良いと考えたのですが、それは実現できず、町子さんは「聖ルカホーム」へ移ることになりました。楽しく穏やかに過ごせますように願っています。

(世話人 米田桂香)

ありがとう

六年三組 大森 妃 葵

この夏、わたしの伯父が倒れた。障がい者であり、とても優しくサッカ―が好き、不自由ながらも全力で私と触れ合ってくれる。私にはそんな伯父が大切な家族であり、当たり前前の存在である。

しかし、発作を起こしている伯父を見るのはとても辛い。立ってられない程、心が締めつけられる。いつ起こるか分からない発作の恐怖、不安。それよりももっと強く抱かされる思いがある!面白おかしく見る人、怖いもの変わったものを好奇の目で見る人...そして今の時代はそれを動画に撮り、またそれを好奇の目で見る人さえいる。

「許せない?いや、私は悲しい」障がいがあるから、発作が起きるから「特別」なわけでもない。皆、同じなのだ。傷付く心も喜んだ笑顔も。皆、同じなのだ。

たった少しの事、ただの好奇心からしたことかもしれない。しかし、どんな結末になっていることが...

人の繋りや信頼はふとした事で切れてしまつ。一度切れたものは簡単に修復できない。何倍・何十倍もの時間と労力を費やす。人を傷付ける事は実にたやすいが、傷付いた心を戻すのはとても難儀な事なのだ。妹である私の母が言つ。

「ごめんね。見なくていい事も、あなたにたくさん見せてきたのかも知れない。傷付いたり、恐怖を感じさせてきたよね。でもね。お母さんは兄が兄でよかったんだよ。ただ、みんなで一緒に笑っていられる日々がある事が、とてもありがたいんだよ。」

「ありがとう。私も伯父が大好きだ」
私は思つ。

(利用者家族)



SV研修2021について

富市立養護老人ホームきんもぎ 片山喜之

昨年度実施した「主任等研修」は、副施設長や主任たちを対象にしたものでしたが、思いのほか好評だったので、本年も「主任等研修」を行うことにし、さらに、本年2021年度は、管理者たちにも対象を広げることになりました。

主任たち対象の研修では、「困難事例」のように対応するが「また、そのような案件で苦労している現場職員たちをどのように助け育成していくか」を学びたいということになり、一方、管理者対象の研修では、「職員の育成」と、それに関連した課題解決の取組みについて学びたいということになりました。

いずれも、「スーパービジョン研修(SV研修)」と名付けられ、やまばと学園の次世代リーダーを育てたいという願いの下にスタート。

六月、七月には、管理者、主任の区別なく全員が、久田則夫先生(日本女子大学教授)から「良いスーパーバイザーとなるために」という講義を受けました。八月、十月は、各二回ずつ、主任たちが提出した困難事例(その中から選定した事例)について、吉浦輪先生(東洋大学教授)の助言やご指導の下、自分たちの間でも検討し、学びを深めました。吉

浦先生によるSV研修は、十二月にも二回開かれる予定です。二回開催するのは、主任たちがどちらかを選べるよう配慮したためです。

管理者対象のSV研修は、九月、十一月と、横尾恵美子先生(聖隷クリストファー大学教授)にご指導いただき、新しい気づきを与えられました。そして、二人の講師との調整や、進行ファシリテーター的な役割を、佐々木炎先生(当法人の理事)に担って頂きました。

新型コロナ禍の中、今年度もZoomによる研修となりましたが、途中で別れて少人数のディスカッションが出来たり、講義資料を画面上で共有出来たり、受講中も文字送信出来たりと、そんなことを体験し、こうして世の中は変わっていくんだと改めて驚かされました。

皆で検討できなかった事例のうち、早急に話し合っべきとされた案件に関しては、研修とは別に個別のSV指導を吉浦先生から受け、参加者たちからは、「もやもやが晴れた。安心した」との反応がありました。今後もより良い研修にしていきたいと思います。



(施設長)

あごごと、「ごめんさい」、ごじょうぶ

ワークセンターやまばと 田澤岳大

初めに題名の3つの言葉ですが、数年前に亡くなった祖母が、亡くなる前に親戚一同に残した言葉です。祖母は「この言葉を使えば皆とつまくやれるよ」と話していました。

私自身、はじめてケアセンター野ばらで働き、その後、異動を通して希望寮、ワークセンターやまばとと様々な利用者や職員と出会うことになりました。部署が変わるたびに、そこで生活する人たちが働く人たちの個性や考え方が違い、雰囲気はガラリと変わる事を感じました。そんな中でも、この祖母の言葉を忘れな

いで働いてきたつもりです。「ごんごんごんごん、いつでも使っているよ!!」意識しなくても出てくる言葉だよ!!」と思われるかもしれませんが、でも何気なく使っている言葉にこそ、支援の基本があると私は思っています。

まずは「ありがとう」…感謝の言葉、聞く过瘾くなる言葉、ご利用者が何かしてくれたとき、「ありがとう」と言つと、とても、うれしそうな表情になります。

次に「ごめんさい」…謝罪の言葉、相手に敬意を払う言葉、仲直りの言葉。

最後に「だじょうぶ」…鼓舞する言葉、相手を心配し、支える言葉。ご利用者も落ち込むことがあります。家庭で何かあったのか、作業がうまくできなかったのか分かりませんが、ご利用者が元気がないときは「だじょうぶ」と声をかけるようにしています。気分がかわって元気になる感じがします。

支援の技術等に専門的知識や経験等が大事なことは言うまでもありません。しかし、それ以上に相手と心を通わせる事が福祉(支援)の基本であるとわたしは考えています。

実は私自身は、未だに、これだ!! という支援方針を、見つける事が出来ていないのですが、それでも3つの言葉を大切にして、これからも利用者や職員と共に手を取り合っていきたいと思えます。

(施設長・サービス管理責任者)

歩みのあと

(9月1日〜10月31日)

- 全体的なこと ()は実施日
- ▲横尾先生によるSV「スーパージョ」研修。(9/14)
- 法人全体防災訓練。(10/12)
- 吉浦先生によるSV研修。(10/8・27)
- 苦情解決委員会。(10/26)
- 個別のニュース
- 法人)ささんか真菜定礎式。司式は榛原教会の山田静夫牧師。(9/10)
- 第3回理事会。主な議題は、建設工事契約や希望寮厨房設置工事と浄化槽改修工事について等。(9/18)
- 理事長が牧之原市社会福祉協議会評議員会に参加。(10/25)
- 理事長が吉田町障害者福祉推進委員会に参加。(10/27)
- 秋祭。感染予防しながら、内輪のお祭料理に益踊りコンサート等。(9/24)
- 県強度行動障害支援者養成研修会で発表。(10/20)
- 島田市健康づくり課によるブラッシング指導。(10/21)
- 「みぎわ」誕生会。(9/19)
- 利用者中心のミーティングを開催。(9/25)
- 外壁屋根改修工事終了。(10/23)
- 野ばら」理事長と保護者の懇談会。終了後、保護者会。(10/15)
- 日中活動支援部会職員研究会大畑館脇
- 「やまばと希望寮」炊きだし訓練。(9/1)
- 食事運搬用エレベーター補強工事。(9/18)
- 男性利用者がてんかん発作と思われる症状で入院。(10/20)
- 「わかばもくれん」⑤男性利用者入所。(9/13)
- ⑥女性利用者2名入所し定員に。(10/14)
- 「ささんか」駄菓子の中からお菓子を選んでささんか硬貨で買物。(9/10)
- 実習生も緒にシヤロムと花火を楽しまむ。(10/14)
- 「カサブランカ」市健康づくり

課の保健師が歯磨きの指導。(10/20)

●希望の家:ふれあい」の退所することになった利用者の壮行会。保護者と緒に今年度2回目の実施。感謝。(9/10)

●「ミニ」ボウリング大会。(9/10)

●「ハロウィン」仮装。(10/20)

●お面や帽子等で仮装し写真撮影。(10/15)

●「なのはな」9月に準職1名正規職員へ身分変更。「なのはな」の「ワークラリ」。島田市内の各ポイントで課題をクリア。買い物訓練等。(10/22)

●「あさがお」初倉包括支援センターの協力で「あさがおしまと」(実施)自由参加)保護者の参加あり、今後も継続したい。(9/4・18)

●青野先生のリフレッシュ体操。(9/21)

●「世界に」の念珠作り体験」など楽しむ。(10/25)

●「Wordやまばと」職員会議で、危険予知トレーニングを演習。自主製商品の店頭販売拡大、利用者へのパン、菓子マニエール作成、多くの利用者が関われる様に話し合う。旅行が中止、施設内でクラブ活動等。

●「3モス」3年間自転車通所した利用者が定年で契約終了。壮行会を行う。10月から「希望の家」利用に。(9/30)

●「ハロウィン」ピエロの扮装と、巧みな話術で盛り上がる。職員も仮装し、緒に写真撮影。(10/15)

●「かたくりの花」入院中の利用者が在宅生活困難により退所。(9/30)

●浄化槽プログラム実施。(9/4)

●収穫できなかつたが、オリブ畑を散歩し楽しむ。(10/8)

●「かたくり」リミック開催。感染予防徹底し応援合戦も白熱。(10/14)

●「さくら」リモート対応で環境整備。前庭敷石の突出を発見、外周の木の根の肥大化が原因、吉田町の修繕依頼。

●「マーガレット」久しぶりの外出。自販機でジュースを買うのも月

1回のお楽しみ。(9/27)

●ボツチャ大会。ナイスショットの連続。(10/8)

●誕生会。買物体験。おやつ選びに夢中。(10/21)

●職員インフルエンザ予防接種。館内清掃。(10/23)

●「レタスクラブ」法人内事業所から毛糸が届き、男性もマスコット等を制作。(9/15・29)

●焼津カレッジショップ訪問。引きこもりがちな利用者もいきいき。(10/15)

●利用者の就労1年経過をお祝い。(10/26)

●「マーガレット」仮装して訪問。歌を披露。(10/29)

●生活支援センターやまばと

●圏域重心医療連携研修(9/22)

●牧之原市地域生活支援拠点説明会。医療的ケア児等養成研修。(9/28)

●牧之原市成年後継人制度個別支援協議会(10/19)

●「聖ルカホーム」ユニット毎の敬老会。(9/22)

●「ハロウィン」夜間設備点検。飾りつけと仮装衣装を用意し写真撮影。(10/4・31)

●お菓子作り。お羊の茶巾絞りをご利用者と職員で。(10/12)

●「グレイス」屋外で秋祭。夕方から露店でのゲームや軽食。益踊りや花火も。(9/24)

●坂部ふれあい丘事業所。ぶどうの木の手合で行う。サロンの皆様と楽しく遊びたい。(10/8)

●「相寿園」牧之原市指定管理者選定委員11名が「現地視察」来訪。施設や利用者の様子を質問される。(9/30)

●県による指導監査。(10/12)

●「ぎんもくせい」敬老会を実施。(10式典のみ)(9/16)

●市にコロナ禍での経営難について要望書提出。(10/11)

●「真菜」敬老会。白寿3名、百寿1名と最高齢の百一歳を盛大にお祝い。手作りのお守りをプレゼント。(9/20・22・23)

●牧之原市介護者のつどいの予定もコロナ禍で中止。(9/26)

●勝間田小学校で寸劇等を交えて福祉の授業。(10/7)

●今年はおリブを収穫できず残念。(10/8)

●真菜リンピック。輪投げやお菓子掴みが好評。

第49回 すまいる石・コンサート

12月10日(金) 18時

日本基督教団 霊南坂教会 1Fホールにて。

港区赤坂1丁目14番3号

(地下鉄・南北線六本木1丁目から徒歩5分・銀座線溜池山王から徒歩6分・日比谷線神谷町から徒歩8分)

【お問合せ】 Tel.03-3159-6919

- 「すずらん」敬老会。最高齢98歳、写真と亀饅頭と感謝状にケイキのプレゼント。(9/20・21)
- 坂部サロン参加。(グレイス)に掲載。(10/8)
- 「さくらん」苦情1件。隣の駐車場の境界線を越え、停めてしまった。(9/28)
- 「シャロム」コロナ感染の休業。サレビスの代替調整。(9/24)
- 坂部サロン参加。(グレイス)に掲載。(10/8)
- 「オリブ」牧之原市中間ヒアリング。計画の進捗。来年度の人材・予算。市へ上半期報告。(4月・9月)
- 「ぶどうの木」敬老会で記念状を手渡す。利用者や職員が茶姫に。白玉ぜんざいとお茶を頂く。長寿の秘訣や抱負を聞く。「虫の声」を陶器やガラスの器で演奏。(9/14・27)
- 2階への垂直避難訓練。介助方法検討。(10/4・15に5回)
- ボランティア活動
 - 活動者名簿(敬称略、順不同)
 - 個人:内藤きよ子、吉崎伸男、井部小島茂美、大塚春美、尾崎淑子、職員家族、内藤美奈子、中西雷太郎。
 - 団体:日赤奉仕団(清拭縫いとユニット中庭の草取り)、さくらん会(受診送り出し)。
- 実習生受け入れ
 - 「垂穂寮」 常葉大学 2名 10/25・11/5
 - 島田市立看護専門学校 3名 10/26・10/27
 - 「3モス」

寄付金状況報告 (単位:円)

	寄付金	指定寄付金	誌代	合計
4月~9月	5,527,370	1,107,700	906,416	7,541,486
10月	583,789	0	80,215	664,004
計	6,111,159	1,107,700	986,631	8,205,490

あとがき

☆入江杏さんは文筆家で、上智大学講師。犯罪被害者の悲しみ、苦しみに向き合い、葛藤の中で「生き直し」をした体験から、「ミシユカ」の森」の活動を核に、悲しみの発信から再生を模索する人たちのネットワークづくりに努めています。

☆表紙の写真はワークセンターあさがおのご利用者、いつも元気に歩いて通っている20歳のスポーツマン、明るい笑顔で周囲を明るくしてくださる方です。

☆コロナを気にしながらの年末となりました。来年もどうかよろしくお祈りします。(一)